

主題「道徳的課題を自分事として捉え、自己のよりよい生き方を考え続ける生徒」の育成

1 主題設定の理由

中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編では、道徳教育の目指す生徒像として「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、人間としてよりよく生きるために道徳的価値に向き合い、いかに生きるべきかを考え続ける」ことが示されている。そのような生徒の育成には、自己の生き方や目指す社会を見据え、その実現に向けて直面する道徳的課題を自分の問題として捉える力が重要であると考え。

生徒は未来創造科において、自らが実現したい未来を描き、現代的な諸課題について探究している。一方、道徳科ではその課題に内在する道徳的価値に焦点を当て、自己の生き方との関連の中で考える点に違いがある。例えば、「移民の増加」については内容項目「国際理解・国際貢献 (C-18)」を、「地球環境の変化」については「自然愛護 (D-20)」を手がかりに、道徳的観点から問題を探究する (図1)。

昨年度の課題として、生徒が個人で考えた課題を類型化した際、自分事として捉えられず、自己のよりよい生き方を考え続けることに困難な状況が散見された。

以上のことから、今年度も研究主題を「道徳的課題を自分事として捉え、自己のよりよい生き方を考え続ける生徒」の育成とし、探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して実践研究を進める。



<図1「現代的な諸課題」と内容項目の関連の例>

2 生徒がエージェンシーを発揮し、探究的な学びをデザインするための具体的な手立て

(1) 5つの学習過程

本校では道徳の授業を5つの過程として捉えることで、生徒が道徳的課題を自分事として捉え、自己の生き方を深める姿を目指したいと考えている。

「気付く」の過程では、アンケートやスタディログを用いて、生徒が過去・現在の自己の体験を振り返り、その体験に内在する現代的な諸課題、道徳的課題を認識し、問題意識をもつ。

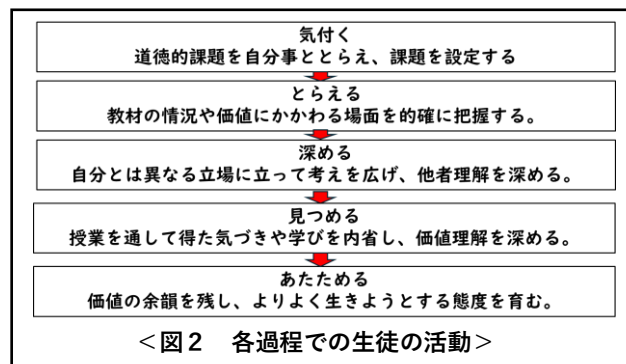
「とらえる」の過程では、教材や具体的なエピソード

に触れながら、自分の体験と重ね合わせて価値や状況を理解することを重視する。生徒は、そこに表れている道徳的価値 (例：責任感や思いやりなど) を確認し、その価値がどのような行動や判断と結びついているのかを考える。そして、自らの内面と照らし合わせる中で、自分にどのような道徳性の側面が求められているのかに気づき、クラス全体で探究すべき課題を見出していく。

「深める」の過程では、教材や対話活動を通して、異なる意見や立場にふれることで、より多面的・多角的に考えを広げたり、道徳的価値そのものについての発問を行うことで、価値についての理解を深めたりすることができるようにする。グループ討議などで自他の思いや背景を理解する姿勢を養う。

「見つめる」の過程では、これまでの学びや自己の考えを振り返り、自分の行動や価値観にどのような変化があったかを内省する機会を設ける。そこから新たに見えてきた課題や問いを明確にし、「自分はどのような人間でありたいか」「今の自分はどうかであるか」を言語化することで、自己理解を深める内省に重きを置く。

「あたためる」の過程では、教師の説話、映像、同級生の実践紹介など、感情に働きかける教材を通して、価値の大切さを印象深く伝える。他者の姿から学びを重ねることで、自らの生き方と価値を重ねて考える時間とする。「心に残ったこと」や「これから大切にしたい価値」を共有することで、よりよく生きようとする意欲や態度を高める機会とする。



<図2 各過程での生徒の活動>

このように5つの過程で構成することで、生徒の内面的成長と実生活での体験とを往還する深い学びが創出され则认为している。

(2) 対話を活性化させる意見表出ツールの活用

昨年度に見られた課題である議論への当事者意識の希薄さへの対応として、本年度は意見表出ツール(Padlet等)を活用する。生徒が授業中に自身の考えや問いをリアルタイムで表出できる環境を整えることで、個人の内面に生じた問題意識を可視化し、他者と共有する契機を生み出す。これは、相互理解の促進だけでなく、自己の意見が受け止められる体験を通じた自己有用感の醸成にもつながると考える。

投稿された意見や質問の取り上げにおいては、内容項目や育成を目指す道德性の諸様相に応じて、次の2つの視点を重視する。

一つ目は「量的視点」である。まず、多くの生徒が関心を寄せている意見や問いを取り上げ、学級全体で共有されている価値や葛藤を扱う。続いて、初めの問いとは対照的な立場や価値観からの意見や少数意見を紹介し、さらに中立的な視点や関連する別の内容項目に言及する問いを扱うことで、価値の対立や多様性を自覚する学びへとつなげる。

二つ目は「質的視点」である。①人間理解、②他者理解、③価値理解、④自己理解という四つの視点で問いを構成することで、生徒の道德的思考が深まるよう工夫する。時間軸を変えて過去・現在・未来の自己に問いを投げかけることで、自己を多面的にとらえる内省対話の場を形成する。

3 授業実践例

(1) 内容項目・主題名

C-(15) よりよい学校生活、集団生活の充実 「よりよい学校をつくるためには？」

(2) 実施時期／学年／配当時間 令和7年3月／第2学年／全2時間

(3) ねらい

学友討論会や卒業式という共通の体験から見いだした道德的課題について考え、議論することを通して、学校の一員としての自覚をもち、自分の役割と責任を自覚してよりよい学校をつくっていかうとする道德的態度を育てる。

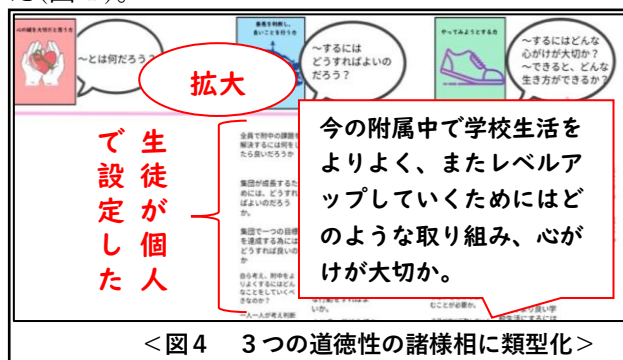
(4) 実践の概要

「気付く」の過程では、学友討論会を通して、生徒たちは附属中の課題に目を向け、「一部の人だけが頑張るのでは伝統が途絶えてしまう」といった意見を共有した。これらの気づきは、学校生活をよりよくするための課題として自覚され、多くの生徒が道德科の内容項目「よりよい学校生活、集団生活の充実」と関係づけて捉えていた(図3)。

「とらえる」の過程では、自らが感じた課題に対して必要な道德性について個人で考え、クラスで出し合いながら類型化を図った。その結果、「学校生活をよりよくするためには、道德的意欲が必要である」との共通認識が生まれ、生徒自身の言葉で「附属中の学校生活をよりよくするために、一人一人がどのように学友会活動に取り組み、どのような心がけが大切だろうか？」という課題が設定された(図4)。

「深める」の過程では、教材を手がかりに、生徒は心の数直線を用いて自分の立場を見える化し、他者と比較することで違いや共通点に気づいた。対話したい相手を自ら選んで意見を交換する活動では、「～の場合はどうする？」といった具体的な場面設定を通して、考えを多面的・多角的に考えていく姿が見られた。その後、自らの考えを再考し、意見の変容理由や自分事として捉えた課題についてパネルディスカッションを行

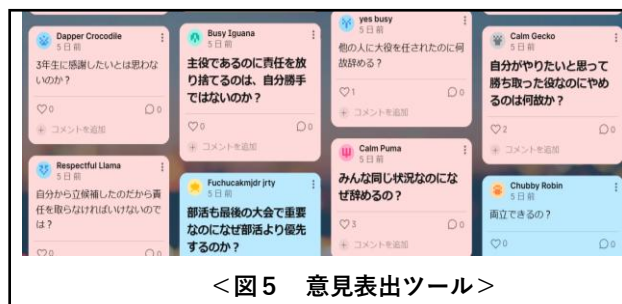
<図3 生徒が選んだ内容項目>



った。発言しない生徒も Padlet に質問を投稿し、対話に多様な視点を加え、学級全体での協働的な議論が展開された（図5）。

「見つめる」の過程では、卒業式での経験を手がかりに、これまで考えてきた学友会への関わりを自己の行動と結びつけて見直した。その中で、「1年後、先輩のように誇りをもって卒業するには、どんな心がけが必要か？」という新たな問いが生まれた。「先輩方が誇りをもてたのは、学校行事に全力で取り組んだからではないか」といった意見も出され、日々の実践と自己の生き方を重ねて捉えようとする姿勢が見られた。

「あたためる」の過程では、生徒たちは道徳的課題を通して深まった学びをふり返し、「附属中の一員としての誇りをもてるように、自分の役割を自覚し、よりよい附属中を全員でつくっていききたい」と思いを言葉にした。自ら課題を設定し、対話を通して再解釈し、価値の自覚へと至るこの過程は、道徳科が日常生活と連動し、生徒の内面に働きかける生き方の授業として機能した成果だと考える。



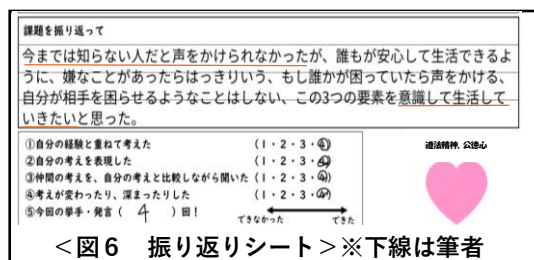
＜図5 意見表出ツール＞

4 研究の成果と課題

本研究では、生徒が道徳的課題を自分事として捉え、自己の生き方を深める姿を目指し、5つの学習過程と意見表出ツールを活用した研究を行った。その結果、「学びを振り返って、新たな問題について考え、議論することで、生き方についての考えを深められたか」という質問に、82%の生徒が「そう思う」と回答し、年度当初の74%から8ポイント向上した。現代的な諸課題を起点に道徳的価値と向き合い、対話と内省を重ねたことで、自己の生き方の省察が促されたと思われる。また、内面の変容を伴う学びの深化が見られた。特に「見つめる」「あたためる」の過程で、自己の成長を自覚し、今後への意志を言語化する姿が見られた（図6下線部）。

意見の深まりや相互応答が活性化し、他者の考えに触れて考えを再構成する姿も見られた。

一方で、課題も見られた。例えば、対話の場面では生徒によって意見の深まりに差があり、特に少数意見や対立する価値観に対して自分の立場を再解釈することに難しさを感じている生徒もいた。また、「見つめる」や「あたためる」の過程において、自分の学びを自己の価値観や行動と結びつけることに困難を抱えた生徒も一部見受けられた。他者との対話を通して価値観を問い直す力を育むための支援の在り方について、今後の検討が求められる。



＜図6 振り返りシート＞※下線は筆者

5 今後の展望

本実践を通して、道徳科における学習過程を生徒とともに構築、共有することが、生徒の当事者意識を高め、道徳的課題を自分事として捉えることに効果的であると確認できた。また、日常生活における共通体験を出発点として価値を考えることで、道徳科の学びが現実とつながり、生徒の自己の生き方へと結びつく循環を生み出すことができた。

今後は、5つの学習過程や意見表出ツールの活用方法を精緻化し、特に「深める」「見つめる」「あたためる」の過程での内省や再解釈をより豊かにしていきたい。また、生徒自身が自らの学びの過程をメタ認知し、価値を問い直しながら、自己の生き方について継続的に考えていけるよう、評価やフィードバックの仕組みについても再検討していく。

＜参考文献＞

浅見哲也・安井政樹（2023）『道徳授業の個別最適な学びと協働的な学び ICTを活用したこれからの授業づくり』，明治図書出版。

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』，教育出版,p.91.